

第十一回 「東から西へーウクライナでの多くの出会いー」

岡部 芳彦

ウクライナを語る上で重要なことのひとつが、国の多様性です。使用する言語一つとっても東ウクライナではロシア語が、西ウクライナではウクライナ語が日常語として使われることがほとんどです。また、ディアスポラ（民族的離散）を経て、ウクライナにたどり着いたいろいろな民族の人々もウクライナ人として暮らしています。

ウクライナの真ん中に位置する首都キエフに昨年、初のイスラム教寺院ができたと聞いて非常に興味があったのですが、チェチェン人のディアスポラ協会の会長とお話する機会があり、訪問することが出来ました。ウクライナのムフティー（イスラム教の最高指導者）であるタミム導師自ら案内してくれました。モスク内の学校では、子供たちがウクライナ語、ロシア語、アラビア語、チェチェン語の4か国語を同時に勉強していてちょっとビックリしました。



キエフのモスク(イスラム寺院)。



子供たちが4か国語で学んでいるところです。

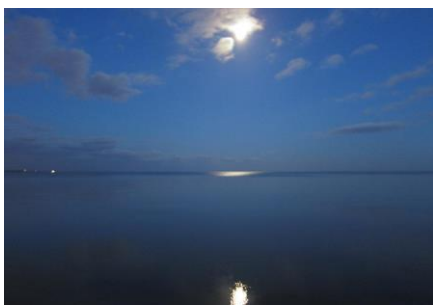


タミム導師が道中の無事を祈ってくれました。

東ウクライナのドネツクから車で2時間ほどの港町マリウポリ市に到着するとウクライナ登録コサック軍団(Українське Реєстрове Козацтво: УРК)が歓迎式典を開いてくれました。マリウポリはアゾフ海に面しており、神戸と似た風光明媚な港町です。NHK がロシアやシルクロードなどの番組を制作する際によく取り上げますが、ソ連崩壊後、それまで禁止されていたコサック（ウクライナと南ロシアなどに生活していた軍事共同体）が復活をします。URK はウクライナ全土に7万人の会員を持ち、各種学校でコサック文化を通じて道徳教育を行う活動に力を入れています。ここでは URK が関係する3つの学校を訪れました。マリウポリにはオスマン・トルコから当時のロシア帝国の一部であったウクライナに移住したギリシャ人ディアスポラの大きなコミュニティがあります。ウクライナ人なのにギリシャ系の名前も多いです。訪問先のひとつはそのギリシャ系ディアスポラの学校です。URK の支援を受け、子どもたちはコサック文化を通じてウクライナ人であることを自覚するとともにギリシャ文化教育を受けています。



ウクライナの小学生たちが民族衣装を着て歓迎してくれました。



アゾフ海に到着。海面に映る月が幻想的です。



ギリシャ系学校でウクライナ式の歓迎を受けました。この日は先生方もコサックの制服を着ています。



リヴィウの街並み



リヴィウ大学で町と大学の歴史を聞く。

東ウクライナのドネツクから一度出国してロシア・モスクワのブヌコボ空港へ飛び、一番西の端のリヴィウ市へ到着しました。リヴィウは日本ではあまり知られていませんが、町は戦争でも破壊されず、まるでウィーンのような美しい歴史的景観が保存されています。歴史地区はユネスコの世界遺産になっています。

リヴィウではリヴィウ市中小企業家連盟で日本経済について講演させていただきました。質問も多く、議論が活発で面白かったです。24歳でアジア系レストランの開業を目指す女性など若い起業家も育っている印象を受けました。講演したのちに放射線を計測するガイガーカウンター製造会社へ。このガイガーカウンターの会社は福島原発事故のあと約3万台を日本に輸出し日本の警察なども使用しているそうです。意外なところでウクライナが日本を助けているなと感じました。



リヴィウ市中小企業連盟で講演。皆さん熱心に聞いてくださいました。

リヴィウ市での最後はうって変わって、郊外でコサックの伝統的な生活を続けるイヴァンさんを訪ねました。ウクライナやコサックの歴史をお聞きしながら夕食をご馳走になりました。「サマゴン」と呼ばれる自家製酒でもてなしてくれました。地域、人種、職業を問わず、できる限り多くの人の話をお聞きすることで、少しでもウクライナの理解が深まった気がするとともに、またこの国が好きになりました。



見せてもらったガイガーカウンターのうち一台はすべて日本語表記でした。



イヴァンさんが作ったウクライナ料理を頂きながらお話を伺いました。自家製酒「サマゴン」は一説には70度もあるとか。



最後はコサックの伝統的衣装を借りて二人でパチリ。似合っているでしょうか？